業務部速報

No. 104
発行 23. 4. 8
JR東労組 業務部

申10号 真の原因究明による安全哲学を再確立し、組合員が「安全・健康・ゆとり」を実感できる職場の実現をめざす申し入れ団体交渉を行う！

第3回交渉
3月31日開催
1、2項を議論

1項　三現主義（現地・現物・現人）の原点に立ち返り、予防安全に努めること。また、再発防止のための真の原因究明を確実に実施し、安全哲学を再確立すること。

※日勤教育の議論は「緑の風 NEWS No.136」に掲載

●組合	■会社
●幕張車両センターにおいて推進運転でシャッターに衝突した事象があった。現場が教育を求めていたのに、なぜ実施されなかったのか。	■シミュレーター訓練の方が多くの人が行えて効率的なため、シミュレーターを活用していた。実際の電車を動かして緊張感を持って行うのは効果的な訓練である。両方を活用し、効果的に行う。
●予防安全の観点から、職場の声に基づいた教育を行っていくことも重要な観点だ。認識はどうか。	■実際に作業する社員の考え、不安を把握し、効果的に訓練することは重要。引き続き社員の声を聞きながら進めたい。
●京葉車両センターの感電について、現場の作業を行う P 社の社員が現場の現状を理解していない現実、メセ社員が特常的な設備に対して注意喚起を行っていないことも 1 つの原因としてあるが、何故発生したのか。	■1つは思い込み。車セ構内に本線の電源が入り込んでいると思っていなかった。補助表を見ても分かりにくい特殊な箇所だった。また、両端接地と停電確認の最後の砦が省略された。
●現場の技術継承が上手く出来ていない。原因として、外注化が進んで、現場の機器に触れる機会が少なくなっているとの声がある。課題として認識しているのか。	■外注化したから現場に行かなくて良いとは全く言っていない。直轄での作業や、TEMS の作業に入って、現場で体で覚える重要性はあり、引き続き取り組んでいく。
●東京駅で車椅子用スロープを撤去せず起動した事象について、乗降案内中に合図を出すことがないようなルール化が必要である。	■今事象をさらに重く受け止めて、本社として全社的にグレードを上げて対策をする。
●工務職場では列車を止めることに勇気を持たなければ、止められないとの声が上がっている。JR 社員、パートナー会社社員も同様である。背景には、事情聴取に対する嫌悪感がある。正しく報告しなければ原因を究明すること出来ず、対策にもならない。現実をどう認識しているのか。	■列車を止めるのは本当に勇気がいる。止めることに対する抵抗感を少なくする一方で、なぜ止めたのかについて、現状把握はせざるを得ない。一定の事実確認はするが、いたずらになぜ止めたのかと言うつもりなはない。しっかり正しく聞き取りしている。

組織事故・事象と捉え、原因究明を行うべきだ！

2項　各系統を問わず、要員不足が起因とも捉えられる課題があるため、労使議論において必要となる要員管理の「目安」を示すこと。

●各系統において要員不足。懸念し、指摘し続けているとおり出面数管理になり、そもそも超勤が前提で回している職場もある。	■要員が厳しい職種・エリアがあるのは承知している。会社全体では、安定した要員需給である。
●営業では、出面確保のために見習いが急遽本務になることも発生している。	■ 1 本になるのは、技術・技量が身に付いているかどうかで判断される。作業ダイヤ自体入ったことはないが、技量が満たされていることもある。
●現場でやらなければいけない企画業務も多く発生している。作業ダイヤの中で企画業務をやっていたが、それが出来なくなり超勤につながっている。	■仕事のやり方、量など移行して定着を図っている段階であり、無理なく行うように支社を含めて見ている。そこは問題意識がある。
●ノウハウやスキルを持った人の現場間の連携は、有効である。しかし、人がいないが故になかなか実行出来ない苦労を現場は感じている。	■あらゆる分野に精通する人は、なかなかいない。それぞれ得意分野がある。その方を中心に据えて、広げることは地道にやっていくことである。
●訓練センターの現状で 1 ヶ月 1 人も訓練に参加させられない乗務員職場もある。安全レベルの維持・向上にも影響を及ぼしかねない。	■乗務員が、厳しい状況にあるという認識はしていない。コロナの状況で訓練時間を割くことが出来なかったのは想像できる。
●1 つの統括センターでは要員が足りているが、A 駅、B 駅、C 駅のそれぞれの出札・改札・輸送などの担務につける要員が、足りているのかが重要だ。	■見習いが一定程度いれば厳しい状況になる。出来る仕事が増えれば勤務が組みやすくなる。ここを乗り越えれば、違う良い景色が見えるのではないのか。

議論に必要なデータを示すことは確認！

安全第一の職場風土を再確立するため職場の実践をつくり出そう！